

あげられて一たまりもなく田圃たんぼの中にけり込まれてしまいました。

その頃三〇頭から四〇頭の牛の群れを追った南部の伯楽げらくが春と秋の二回、幾組も幾組も、牛追うしおい歌を唱いながら遠く常陸ひたちの国のほうまでのんびりと日を重ねながら牛売りの旅たびを続けていたのです。

里の家では馬を多く飼っていましたが、酒屋は勿論のこと、運送を業とする人達は沢山たまたまの牛を飼っていました。米や鉄・塩などの重い荷物を山上の細い難路を運ぶには、力のつよい牛の方が歩き上手だったのです。

大川原の里に一軒の鍛冶屋かじやさんが住んでいました。酒屋の牛になんか負けるもんかと熱心に手入れしてましたので、鍛冶屋さんの飼う三頭の牛は丸々とふとってました。

鍛冶屋さんは、請戸うけどの浜から仕入れた鉄や附近でできた塩や乾魚を、牛の背にのせては険しい山けわ上の会津街道を中通り地方や会津まで運んで売りさばっていたのです。

その火は五月晴よつばれの良い天気でした。三頭の牛に荷物を一杯つんだ鍛冶屋さんは、とまりを重ねて五百川いほがわ沿いに中山峠を越えて猪苗代湖にたどりつきました。

右には磐梯山が美しい姿を見せていましたし、湖畔のたんぼにはお百姓ひやくしやうさん達の姿が群れていました。